

## 長崎の印刷・出版史

長崎大学環境科学部教授 若木太一

### 一、西洋式活版術の移入

四人の天正遣欧少年使節、伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンが八年の旅を終えて長崎の港に帰って来たのは天正十八年（一五九〇）六月二十日のことであった。

そのおり同行していたイエズス会日本巡察師アレキサンドロ・ロウリアリアノ神父（Alessandro Valignano / 一五三〇—一六〇六）は、西洋式の活版印刷機を持ち込んだ。この印刷機は、ローマからの帰途ポルトガルのリスボンでメスキータ神父が購入したものだ。

ヨハネスグーテンベルク（一四〇四—一四六八）がライン川中流域の葡萄酒の集散地マインツで活版印刷を創業したのは一四六四年と伝えられている。その活版印刷術は、葡萄絞り機から考案したというもので、母型に鉛とアンチモンの合金を流し込んで造った金属活字に、



油性のインクを塗って紙にプレスする方法である。豪華な四十二行本聖書の印刷を行ったことはよく知られる。教会ではそれまで、修行僧たちが数年がかりで聖書を書写していたのであるから、この複製技術は画期的な発明である。

この印刷機はその後イタリア、ギリシャ、フランス、オランダ、スペイン、ポルトガルと二十年ほどの間にヨーロッパ各地に普及した。ヴァリアリアノ神父はこの印刷機を日本布教の強力な道具として持ち込んだのである。鉄砲・羅針盤・印刷機の三大発明を駆使しての、いわゆる十五、六世紀の大航海時代がその背景としてあった。

### 二、西洋式で最初に印刷されたキリシタン版

#### 印刷されたキリシタン版

この印刷機は島原半島の加津佐のサミニナリオ（円通寺跡、天辺の丘辺り）に設置され、布教活動のための宗教教典、語学修得のためのテキスト類の印刷が行

#### 加津佐版

『どぢりいなきしたん』1591年刊  
『サントスの御作業の内抜書』同年刊

#### 天草版

『ヒデスの導師』1592年刊  
『平家物語・伊曾保物語・金句集』1592～1593年刊  
『ラテン文典』1594年刊  
『ラポ日対訳辞書』1595年刊

#### 長崎版

『落葉集』1598年刊  
『ぎやどべかどる』1599年刊  
『おらしよの翻訳』1600年刊  
『倭漢朗詠集巻之上』同年刊  
『日葡辞書』1603～1604年刊  
『日本文典』(ロドリゲス編)1604～1608年刊  
『サクラメント提要』1605年刊  
『スピリツアル修行』1607年刊  
『聖教精華』1610年刊  
『ひですの経』1611年刊  
『太平記抜書』1614年刊?

われた。その後印刷機は文禄元年（一五九二）に天草のコレジオ、河浦町一町田辺りに移り、慶長二年（一五九七）さらに長崎のコレジオへと移動をかされた。長崎のコレジオはトードス・オス・サントス教会（現在の春徳寺、夫婦川町十一番）にあった。三カ所を移動しながらも、およそ五十種ほどが印刷されたが、現存するのは二十九種ほどである。これらの出版物をキリシタン版とよんでいる。代表的ないくつかを右にあげておく。

このうち、天草版、伊曾保物語は、ローマ字で表記されるが、日本最初の西洋文学の翻訳書として文学史の上で注目すべきものである。『ラポ日対訳辞書』は日本語をフレン語、ポルトガル語で対訳したもの。なかでも、『日葡辞書』は見出しに日本語三、八七一語をかけた、ポルトガル語で説明し、用例を掲げる。また、語彙には雅語や俗語、都の言葉や西国の方言など、その位相までを解説する。この辞書は、『日

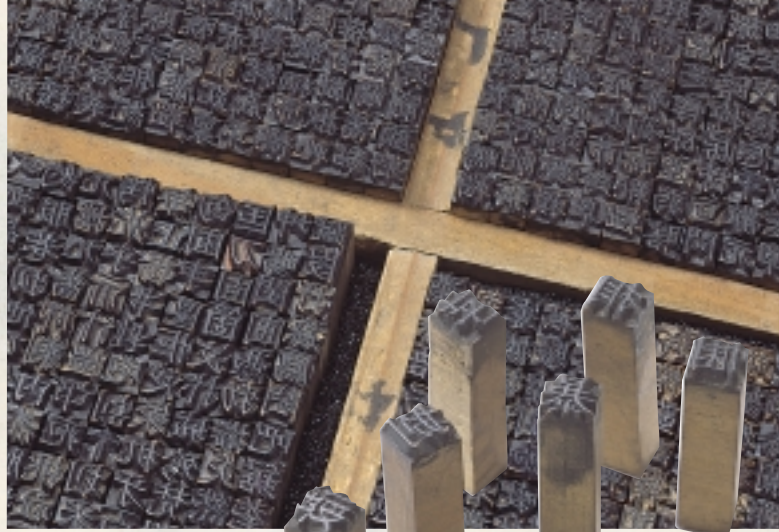


天正18年、長崎にもたらされた日本初の西洋式活版印刷機の複製。(長崎純心大学博物館蔵)



天正遣欧少年使節肖像(京都大学附属図書館蔵)。伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアン、通訳メスキータ

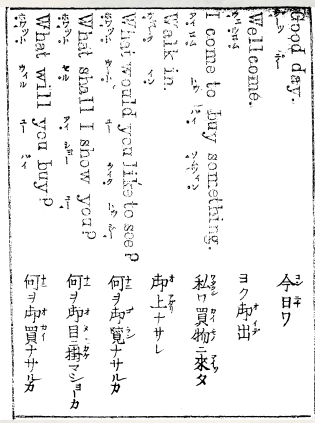
本文典』の編者でイエズス会の通詞をつとめたシヨアン・ロドリゲス神父が編纂の中心となり、日本人イェルマン(修道士)たちの協力で編纂したといわれている。土井忠生(『切支丹語学の研究』三省堂、一九七一年刊)。安土・桃山時代の日本語をローマ字で表記し、当時の発音が写し取られ



本木昌造の試作した木活字。  
(諏訪神社蔵)



『シーボルトの所蔵本目録』  
1862年出島版(複製、武蔵文庫蔵)



『和英商賈対話集 初版』安政6年(1859)  
本木昌造刊(印刷博物館蔵)



近代印刷文化の道を拓いた新町活版所跡。  
(長崎市興善町)



大光寺(長崎市鍛冶屋町)にある本木家の墓。代々オランダ通詞だった先祖らと共に、戒名「故林堂釋永久悟窓善士」が刻まれた昌造の墓(手前右端)がある。

ており、貴重な音韻史の資料でもある。使用活字は主として大小のローマン体、イタリック体が使用されている。ローマン体の大文字四種、小文字三種、イタリック体の大文字三種、小文字二種、そのほか記号の印刷機は力オへと運び出された。

### 三、本木昌造の近代活版印刷

本木昌造は文政七年(一八一四)六月九日長崎新大工町乙名、北島三弥太の四男として誕生した。十歳の時、母方の叔父阿蘭陀通詞本木昌左衛門(一八〇一〜一八七三)の養子となり家を継ぐ。幼名を作之助、また改めて元吉、さらに昌造と称した。義理の祖父は、『アングリ亜語林大成』(一八一四)の編纂にかかわった阿蘭陀通詞本木庄左衛門正栄(一七六七〜一八三三)の十一歳のこの年稽古通

詞となり、その後、小通詞末席、同並と昇進した。そのかたわら化学を学んだ。

本木は西洋の活字印刷機を見る機会があり、諏訪神社に保管されているような木活字の試作を試みている。嘉永四年(一八五二)二十七歳のころ、流し込み活字を考案し、『自著、蘭話通弁』を印刷したらしい(未確認)。安政二年(一八五五)三十一歳のとき、長崎西役所内に活字版摺立所が設置され、その取扱係となった。いわゆる出島版の印刷にかかわるのである。出島版は、長崎奉行荒尾石見守と海軍伝習方取締永井岩之丞と相談し、輸入品の蘭書の復刻をおこなうものであった。このときはオランダ通詞が所有していたヨーロッパ製の活版印刷機を使用した。万延元年(一八六〇)本木は三十六歳のとき飽の浦製鉄所の御用係となり、蒸気船一艘を購入、艦長として江戸・大坂・長崎間の海上勤務をした。

安政六年(一八五九)、本木は増永文治とともに『和英商賈対話集』を発行している。これは鉛活字と版木に彫りつけた整版とを組み合わせたものであり、活版に移行する技術過程であることがわかる。明治元年(一八六八)四十四歳の年、よく知られるように中島川に鉄橋を架けた。こ

の時期は有能な実業家として活動する。この頃、『崎陽雑報』を発行する。これは木活字を用い、政治的な「トラス世間」のつわざ話などを掲載している。

そして四十五歳の明治三年(一八六九)、彼は本興善町の唐通事会所跡に活版伝習所を設立、フルツキの斡旋で上海からアメリカ人ワイリアムガンブル(W. Gambler)を迎え、電胎母型と活字鑄造法を学んだ。翌明治三年、鉛製の金属活字の鑄造に成功した。「新町私塾」を開き十五歳までの子供たちに習字、読書を教え、さらに洋書についても教育した。その年三月、「新町活版所」を開き、わが国最初の民間活版印刷所を始めたのである。翌年、長崎製鉄所を退き、活字製造、印刷事業に専念した。明治五年(一八七二)十一月には『長崎新聞』の発行を開始した。その間、本木は明治三年には大阪に「大阪活版所」を設置、翌年には京都に「點林堂活版所」、さらに横浜の弁天通に「横浜活版所」を設立している。そして明治五年(一八七二)東京の築地に本木の片腕といわれた平野富治によって「東京築地活版印刷所」が設置され、その後日本は次々と新聞の発行、雑誌の刊行がはじまる。写真家の上野彦馬とならんで日本の近代黎明期に活動した本木は、明治八年(一八七五)九月三日、五十二歳の生涯を終えた。